

丹

後ちりめん300年の歴史は、江戸時代の享

保年間に始まります。京丹後市域では1720年に、また与謝野町域では1722年に各地域の先人達が苦勞の末に西陣から技術を持ち帰り、丹後に広めたと伝わっています。

■人は服を着ます。織物は人の人たる所以^{ゆえん}でもあり、最も古い手工芸技術の一つです。求められる技術は時とともに洗練され、やがて高度な織物技術「ちりめん織」へと発展しました。この高価な丹後ちりめん絹織物は「ハレ」

の衣装として暮らしを彩ります。

■300年の間に経営形態を換えつつも、今も丹後は国内織物の一大産地であり続けています。そのことを良く示すものが与謝野町の北東辺部にある白壁・土壁、格子状の窓・エンガキなど多様かつ均整的な意匠の糸屋・機屋の家々が軒を連ねる一筋の道「ちりめんの道」です。

■往還路「ちりめんの道」は、江戸時代に始まるちりめん織^{いしずえ}が現代の丹後の礎^{いしづえ}であり続けている歴史の厚みを醸しています。

(与謝野町教育委員会)

ちりめんの道の機屋の町並み



三河内



石田



岩滝



後野



加悦

日

本遺産「三〇〇年を紡ぐ
絹が織り成す丹後ちりめ
ん回廊」。このたび選定された日
本遺産の構成文化財には、「天橋
立」も含まれています。

これは、日本三景の一つ天橋立
が丹後地方を象徴する景勝地とし
て古くから内外に知られていたた
め、その知名度から「橋立」銘
の付いた丹後ちりめん生地も作ら
れました。また、天橋立の姿は着
物の絵柄としても描かれ、ちりめ
んに限らず女性用着物の裾や男性
の羽織の裏などにも好んで用いら
れています。

与謝野町からの天橋立眺望ス
ポットである大内峠も日本遺産を
構成する文化財の一つです。こ
こからは約3・6 kmの松並木を横
一文字に観ることができることか
ら、「一字観」と呼ばれています。

昭和5年に当地を訪れた与謝野
鉄幹、壘子夫妻がこの眺望を讀え
た歌碑をはじめ、江戸時代から平
成に至る多くの句碑については以
前の連載でも触れています。短
歌や俳句だけでなく、絵画や織物
など、当町に現代も息づく、さま
ざまなもののづくりへの意欲をかき
立てる景観を残しています。

(与謝野町教育委員会)



大内峠妙見堂前からの眺望

飾

り瓦とは、屋根の棟の端に付けられる立体的な瓦

のことで、瓦のつなぎ目を覆い、雨漏りを防ぐ働きをします。

とても身近で、普段は気にも留まりません。また、当地域の屋根瓦は、黒系の単色が多く、目を凝らして見て装飾に気づくほどです。

お寺の大きな鬼瓦は見られた方も多いと思います。こちらも飾り瓦のひとつです。民家で鬼はまれで、隣家が近い京町家では、魔除けにはなるが、お隣さんに近づけるのは……と鐘馗しょうきさんに替わったという説もあるようです。

民家では、さまざまなものを模した飾り瓦が付けられています。近年のものはシンプルな傾向にありますが、古民家では、いろいろ見られます。

例えば、家紋、宝珠、七福神、波雲……など。個人の好みでつくられたので、種類は豊富です。

水に関係が深いものが一般的で、家を火災から守って欲しいという願いが込められました。このように、それぞれの飾りには、その家の願いが込められたのです。

ちりめん街道では、比較の見やすい位置に、桃、恵比寿さん、水玉、鯉、うさぎ、波頭、鯢すい、

大黒さん、鷹、霊獣げんぶの玄武が見られます。

うさぎは旧尾藤家住宅にありま
す。「なぜ可愛らしいうさぎを!?」
と思ったのですが、「月(つき)」
を呼ぶ、前にしか進まない、と縁
起が良い動物だそうです。

あなたのお住まいの近くにも、
珍しい飾り瓦があるかもしれません。
ん。

渋くてかっこいい雰囲気の古民
家に「かわいい」の要素を見つけ
る楽しみも時にはいかがでしょう
か。

(与謝野町教育委員会)



ちりめん街道で見られる飾り瓦の一例 (左：大黒さん、右：うさぎ)



①

丹 後の祭礼屋台を代表するものに「三河内曳山祭」があります。毎年5月3、4日に倭文神社の氏子たちによって開催され、山屋台は4日の本宮で巡行されます。巡行は算所区境の御旅所（打出所）から倭文神社前までが祭礼巡行で、その後は余興として夜遅くまで巡行されます。



②

大型の屋台を特徴づけるものとして「見送り幕」があります。屋台の背に掛ける大型の幕ですが、「見送り」とはよく表現したもので、見物人に余韻を残す後ろ姿と言えましょうか。

三河内曳山祭の歴史を少し紐解きますと、大型の屋台を出すようになったのは明治期からのことで、江戸時代には「昇き屋

台」（担い屋台）であつたと言われます。

また、山屋台の初期の状況は、明治初期に上之町と奥地町が峰山町で使われていた山屋台を購入したことに始まると伝わっています。この時には幕類もセツトで購入したようで、その一部が奥地町の蔵に保管されています。



③

曳山は三河内の人達の気性に合ったのでしよう、各地区の財力で屋台を新調・整備を続け、今の姿となりました。いつまでもこの屋台巡行を見送りたいものです。

（与謝野町教育委員会）



④

- ① 倭文山の見送り幕
- ② 浦嶋山の見送り幕
- ③ 八幡山の見送り幕
- ④ 春山の見送り幕

原在中筆「高士雪景松竹図」 特別公開のお知らせ

3月26日(月)の午後、
旧尾藤家住宅の座敷にはまった
「高士雪景松竹図」の本来
の姿を特別公開予定。
ぜひご覧ください！

日

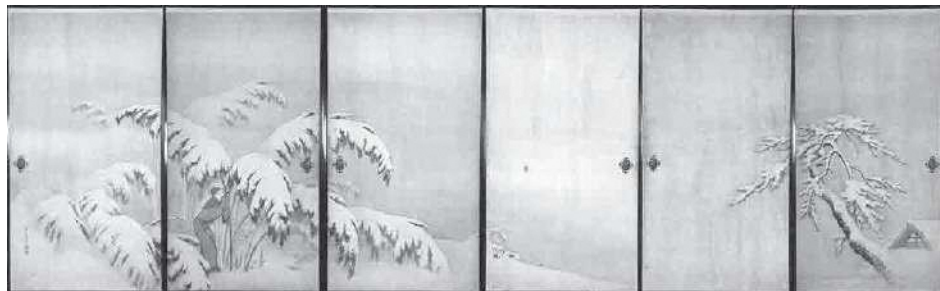
本遺産「三〇〇年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊」構成文化財である旧尾藤家住宅に残されていた襖絵の中から、江戸時代の京都で活躍した画家、原在中(さいちゅう)(1750年～1837年)が描いた大作「高士雪景松竹図」(こうしせつけいしょうちくず)(与謝野町指定文化財)を紹介します。

六面の襖は実際には右二面と左四面とでし字に屈折して配置されます。右二面には雪に埋もれて動じない松と家を配し、左四面には雪で大きくたわんだ竹林と雪落しをする人物が描かれます。

夜中の豪雪がやみ、早朝目を覚ますとお気に入りの竹林の一大事。折れてしまわぬよう、慌てて薄着のまま飛び出して雪落し、といった情景でしょう。いかにも寒そうな人物が今まさに

揺すっている竹からは雪がこぼれ落ちており、その足元には少し早い筍が頭を出しています。右二面の静けさに対し、とても動きのある四面となっており、雪の中の静と動がみごとに表現されています。

(与謝野町教育委員会)



「高士雪景松竹図」 紙本墨画 襖六面

ち

りめん街道に、横浜市から来られた方が、「旧加悦町役場庁舎は、横浜山手地区にあるベリック・ホール（イギリス人貿易商の邸宅）にとてもよく似ている。旧ベリック邸の外観を参考に建築されたのではないか？ 遠い地で縁を感じた」と喜ばれました。

調べてみると、赤瓦に壁の色と質感、建具のかたち、1階のアーチデザイン、メダイヨンと呼ばれる装飾など、外観がとても似ていて驚きました。しかも、旧加悦町役場庁舎の方が1〜2年早く設計されていたのです。

山手地区は、異国情緒が感じられ、横浜観光の中でも人気の場所です。また、旧ベリック邸は、現存する戦前の外国人住宅の中で最大規模であり、建築学的にも価値があると言われています。その建物と似ていることにうれしくなりました。

旧加悦町役場庁舎は、昭和2年の丹後大震災で当時の庁舎が倒壊したため、昭和4年に建て



旧加悦町役場庁舎（京都府指定有形文化財）

られました。設計は、宮津出身の建築家、いまはやしひこたろう 今林彦太郎で、阪神甲子園球場を設計された方です。建築からおよそ90年が経ちますが、ちりめん街道の起点として、人を迎える重要な役割を果たしています。

現在は、老朽と耐震性の問題から、1階しか使うことができません。安心して全館を活用できるよう、今年の1月末に、耐震改修検討委員会を立ち上げ、3月から本格的な調査を始めました。

文化的・意匠的な価値を守りながらの修理は、高度な専門知識と技術が必要で、大勢の方々の力を必要とします。

建物に適した修理がなされ、ますます人の交流や良い縁が生まれる場になれることを期待します。

（与謝野町教育委員会）

日本遺産「三〇〇年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊」構成文化財である旧尾藤家住宅に残されていた襖絵の中から、幕末の宮津の画家、和田屏山（わだへいざん）（1806年～1873年）が描いた「四季花鳥図」を紹介します。

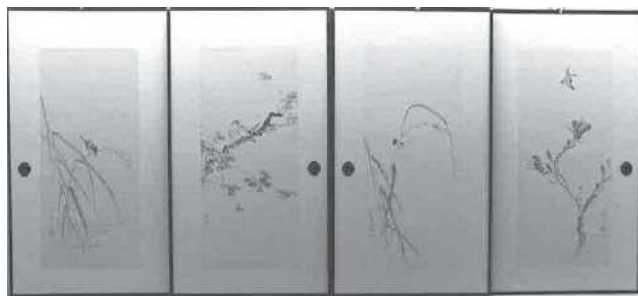
四面の襖の中央にさまざまな季節の花鳥画が描かれています。右から順に「木蓮に文鳥図」、「稻穂に五十雀図」、「紅葉に棕鳥図」、「葦に翡翠図」という風に、季節の順には並んでおらず、冬の花鳥が欠けています。そして邸内の別の間の押入れ襖に「猫柳に燕図」「梅に文鳥図」の二面（いずれも春の画題）がはまるという、奇妙な配置となっています。

襖や屏風の周囲に余白を設け、各面の中心に絵を貼る形式を「押絵貼」といいます。各面で絵が連続せず構図が小さくなる一方、容易に仕立て直しができるのが特徴です。本作はかつて六曲一双屏風十二面の花鳥図だったものを、破損を免れた絵や、当主お気に入りの絵を選り出して仕立て直したものでしょう。常識に捉われず自邸内に絵を配置する、尾藤家当主の高い

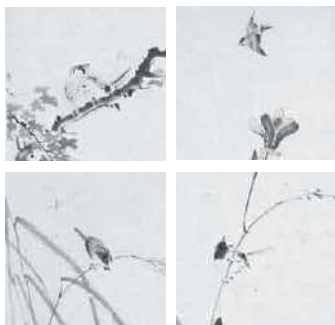
趣味性がうかがえます。

四面の襖絵は江山文庫企画展「花鳥百態」で7月8日まで展示しています。

（与謝野町教育委員会）



和田屏山筆「四季花鳥図」紙本淡彩 押絵貼襖四面



右上「木蓮に文鳥図」／右下「稻穂に五十雀図」／左上「紅葉に棕鳥図」／左下「葦に翡翠図」

時の贈り物 [第98回 明治150年の俳額]

本

年2018年は明治改元150年の記念の年

にあたりますが、与謝区二ツ岩の柴神社には、まさに明治元年（1868年）に奉納された俳額が残っています。

俳額とは寺社に祈願のために俳諧（連句）や発句（俳句）を記して奉納した額のことです。

冒頭に「奉額発句集」の題字、続けて「花鳥風月」として、四季折々の俳句が33句書かれています。

地元与謝地区の俳人12名の名に加えて、大江山の向こう側に現在の福知山市大江町北原から玉山・梅玉という2名が参加しています。

今から150年前の日本には自動車などあるはずもありません。おそらく徒歩で大江山の尾根を越えて交流したのでしょう。当時の俳句愛好家たちの熱心さがうかがえます。

季節の句を少し抜き出してみましよう。

並松のみどり通るやほととぎす

梅花

門の戸の御札よごすな夏の雨

石水

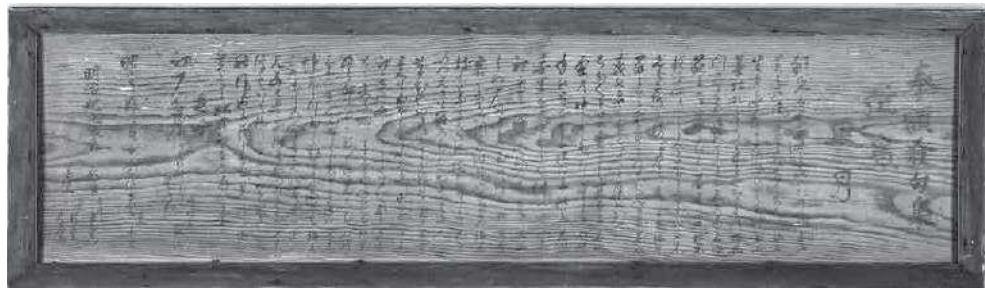
「並松」とはひよつとすると

天橋立の松並木でしょうか？

ともあれ当時の与謝の人々が、移りゆく季節の中で生き生きと俳句作りを楽しんでいた様子うかがえます。

この俳額は現在開催中の江山文庫特別展で見ることができます。

（与謝野町教育委員会）



俳額「奉額発句集」（与謝：柴神社）

大

黒柱と聞かれると、「日本家屋の太い柱」

または「一家の中心となり支える人」を思い浮かべられる方が多いのではないのでしょうか。建築構造上の意味が象徴的にとらえられ、転じて一家の主を表すようになったようです。ただ、近年の住宅では大黒柱がないことがよくあります。建築方法が多様化し、建物の構造が変わったことで、なくても建てられるようになったからです。

しかし、古民家にとって大黒柱はなくてはならない存在です。古民家の大黒柱は、構造的に大きな荷重がかかる建物の中央あたりに設けられ、建物にかかる荷重を地盤に伝える役割を担います。

また、屋根や壁、居室をつくるには横架材である梁や胴差を柱に組む必要があります。それぞれの

材を欠いて組むため、柱の断面欠損は大きくなります。よって、建物が大きいほど、大きな断面

の大黒柱が必要となります。そのため、大きな大黒柱は家の格も表すようになります。

ちなみに、名前の由来は、一家に富をもたらし大黒天を近くに祀つたためとされる説があり、機能を越えて信仰の対象にもされていたようです。大黒柱とも表現され、その響きから縁起の良い大黒になったとも思えます。いずれにしても、磨いて光沢を出すなど大切に扱われていたようです。

大断面の大黒柱からは、意匠的には重厚感や安定感などがあります。大木に成長させるまでの長い年月と、強い材となるよううていねいな乾燥の手間がかけられ、構造材となった大黒柱は古民家の大きな魅力のひとつです。

(与謝野町教育委員会)



旧尾藤家住宅の大黒柱

時の贈り物 [第100回 弥生人の顔「温江遺跡の人面付土器」]

温

江遺跡は、野田川右岸の温江区から

加悦区にまたがって広がる段丘上の集落遺跡です。丹後でも面積の広い集落遺跡の一つで、今までの部分的な発掘調査で、弥生時代前期～平安時代の建物跡や土器片が出土しています。

人面付土器は、村の周囲に巡らせた堀（Ⅱ環濠^{かんごう}）の中から多量の弥生時代前期の土器とともに出土しました。環濠のある村は地域の中心的な村と考えられるもので、当時の村の中心部は、環濠に囲まれた東西約90m×南北約150mと推定できます。

人面付土器は、一緒に出土した土器から推測して弥

生時代前

期中頃（約

2200

年前）の

ものと考

えられま

す。首か

ら下が欠

損して全

形は不明



温江遺跡から出土した人面付土器

ですが、人形のような全身像ではなく、土器（容器）

の口部や蓋に頭部だけが付けられたと推定されます。

残存高8・5cm、顔長9・2cm、顔幅5・6cmで、写実

的かつ立体的に表現され、特に頭頂部から後頭部にか

けて作り出されたモヒカン状の突起が特徴的です。鼻

の穴もあり、耳にはピアス用の穴もみられます。

西日本の弥生時代前期の人面付土器は10例程度しか

ない希少品で、この「弥生人の顔」は当時の信仰・習

俗を今の私たちに語りかけています。

（与謝野町教育委員会）